



No.101

2016年3月7日

公益社団法人日本山岳会富山支部

山岳講演会『白山を巡って—火山と地質、高山植物、

白山信仰と山麓での昔の暮らし』を開催

富山支部主催の上記講演会を平成28年2月24日(水)午後6時半から富山県民会館701号室において開催した。これまで富山支部会員の中から講師をお願いしてきたが、7回目となる今回は国土地理院客員研究員の長岡正利氏(68歳)をお願いした。氏は日本山岳会会員(茨城支部)でJACの科学委員会に所属、昨年3月同委員会主催のフォーラム「登山を楽しくする科学(VII)」でも「白山を歩いて、その花々、火山と地質、白山信仰と山麓での暮らし」の題で講演されている。



つくばみらい市にお住まいの長岡さんは、富山県南砺市(旧福野町)に実家があり、福野高校時代は生物部で私の1年先輩であり、今回約50年ぶりの再会となった。北日本新聞社から『富山の百山』を出版した時に飛行機の窓から撮った写真を使わせてもらった縁で、講演会を開くことができた。

当日は80名ほどの来場者を前に、約500枚のスライドを使い普通の登山では気づかないような白山とその山麓の見どころや魅力について紹介された。カシミールソフトを使って白山の山なみを望見できる範囲を明らかにすることからはじまり、白山で見られる動植物、金沢大学時代の研究分野である白山火山の地質と形成史、加賀・越前・美濃の3つの禅定道、明治初期の廃仏毀釈による山頂からの下山仏のこと、山間部で昭和40年代まで行われたという「出作り」の話、白峰村の特産品など実に興味深く多岐にわたる内容であった。いずれも白山とその周辺に若い時から足繁く通われた長岡さんの対象への深い愛情が感じられた。石川支部の西嶋鍊太郎さんや金大WVのOBの方、国土地理院の方など長年お付き合いのある方もかけつけられた。富山県山岳連盟協賛、北日本新聞社後援。参加支部会員19名。(山田信明 記)

目	次
山岳講演会『白山を巡って—火山と地質、高山植物、白山信仰と山麓での昔の暮らし』を開催…	日本山岳会創立110周年記念式典、祝賀晚餐
10月例会山行・鍬崎山	会と記念懇親山行に参加して…藤井久一
11月例会山行・小倉山	12月例会報告…有澤辰彦
五支部合同懇親山行(石川支部)に参加して	1月富山支部親睦会・例会山行(瀬戸蔵山)
…河合義則	…川田邦夫・北田幹夫
アルパインスキークラブ「秋の全国集会」に参加して	私のかかわった山岳遭難 その5…佐伯郁夫
…近藤 晋	モンゴル草原紀行—ノモンハンへの旅—
	…鍛冶哲郎
	編集後記 …北田幹夫

## 10月例会山行 ・ 鋤崎山 2090m

期日：平成 27 年 10 月 24 日(土)

メンバー：永山、渋谷、山岸

今日の天気予報は午後に傘マークと気がかりな日だ。夜が明けぬ 5 時に家を出る。6 時集合の Gondola 駅は未だうす暗く 4~5 台駐車している。3 人が揃い準備して、6 時始発の Gondola に乗って山頂駅へ向かう。7 年振りの鋤崎山は道中が長く、ラクダの背中のような登山道をゆっくり楽しみたいと思う。しかも佐々成政が軍用金を埋蔵したという黄金伝説の山だ。階段状の登山道を登り、反射板のある瀬戸蔵山山頂から、ブナ林の大品山山頂までの間に単独の男女や女性 5 人グループ等が追い越して行く。私達は休憩を取りながらゆくと進む。やがて鎖場を過ぎ、山頂に近づくにつれて天気予報は外れ、素晴らしい登山日和になってきた。紅葉はピークを過ぎ、ナナカマドの赤い実が艶やかだ。頂上に 9 時 55 分着、狭い山頂は 10 数名の人で賑わっている。360 度のパノラマはやはり満足出来る山だ。

記念写真を撮り、早めに下山。晩秋の山は早めの行動と心掛けています。特にこの山は、往路を引き返して最終便の Gondola リフトに乗れなければ、瀬戸蔵山から栗巣野スキー場側へと歩いて下る事になる。20 数年前、初めての鋤崎山での辛い経験だった。下山時に登り返す大品山はひたすら我慢の歩きで、山頂ベンチでコーヒータイム。愛知県からの男性が休憩していて、今日明日と富山の山を楽しんで行くとの事。早速、去年発刊の『富山の百山』を宣伝し、この鋤崎山を調査、執筆した永山さんも紹介した。Gondola 山頂駅へと歩み、途中の立枯れの木に小さいナメコが顔を出していた。Gondola からの下り斜面は素晴らしい紅葉。13 時 40 分無事 Gondola 駅に着いた。鋤崎山に行き、こんなに速く下山したのは初めてだった。

(コースタイム) Gondola 駅 6 : 00 → 山頂駅 6 : 15 → 瀬戸蔵山 6 : 45 → 大品山 7 : 20 → 鎖場 8 : 55 → 鋤崎山山頂 9 : 55 ~ 10 : 15 → 鎖場 11 : 00 → 大品山 12 : 05 ~ 12 : 30 → 瀬戸蔵山 12 : 55 → 山頂駅 13 : 30 → Gondola 駅 13 : 40 (山岸和子 記)

## 11月例会山行 ・ 小倉山 1020m (きのこ山行)

期日：平成 27 年 11 月 10 日(火)

メンバー：山田、永山、山岸、菅田、渋谷、松崎勇(高岡山岳会)

午前 7 時 30 分福光インターに集合し、2 台の車で出発。インターから飛越峡合掌ラインを通り、雪持林の茂る急斜面を見ながら菅沼合掌集落に入る。菅沼橋を渡り右折し庄川沿いのわずかなスペースに駐車する。登山準備をしているうちに小雨も止んできた。道宗道と名のつく古道に行くのだが、見あげると歩き始めから急登である。小雨のせいか滑りそうな道を登ると案内板が設置してあった。紅葉の最盛期は過ぎていたが、ソヨゴの緑やタカノツメの薄緑の葉が雨に



濡れて光っている。ふかふかのブナやカエデの落葉を踏みながら、更に滑りそうな斜面を登る。暑くなってきた頃、松崎さんが突然木立の中へ、、、「あるよ。ナメコ」の声につられ、行ってみるとたくさんのナメコが目の前に現れた。「おいしそう、これだけ採れたから帰ろうか」などといいながら、二人でせっせと山の恵みを採らせていただいた。途中、木々の間から袴腰山が見えるはずが、小雨のなか全く見えない。ホッとできる場所にたどりつき一休み。姫リンゴをいただき出発。

ナメコに興味のなかった？山田さんがナメコを発見。お裾分けにあずかった渋谷さんも、徐々にナメコモードに変身。永山さんは、静かにナメコを探しながらマイペースで先に進んで行っている。山岸さんは、自作のナメコ採り道具を駆使し、高い木になっているナメコ採りに夢中。たくさん採れたようだ。収穫したキノコを鑑定してもらったり、勉強しながら更にキノコ探しに拍車がかかったようだ。ナメコを発見すると疲れも一気に吹き飛ばす。更に急な道を一步一步高度を上げていくと、いつのまにか小倉山頂上に到着。汗をかいて肌寒いこともあり、昼食もそこそこに記念写真を撮り、下山することにした。帰りはもと来た道を引き返したが、こんな急な道を登ってきたのかとびっくりする。何度か転倒しながらも、駐車場まで無事に降りてこられた。皆様お疲れ様でした。さあ、来年はどここの山に登ろうかなー。

(菅田静子 記)



## 五支部合同懇親山行（石川支部）に参加して

平成 27 年 11 月 7 日～8 日に開催された「五支部合同懇親山行」に山田支部長を始め、7 名で参加してきました。宿泊場所の栗津温泉は 20 年以上も前に一度行ったことがある程度でした。各支部の皆さんの元気な姿は、私も頑張らねばという気持ちを増幅してもらえるいい機会となりました。石川支部の温かいおもてなしに感謝の懇親会でした。

二日目の懇親登山は、旧大内集落の登山口まで車で移動して、天候の関係もあり「火燈山」803 m までの往復コースとなりました。印象的だったのは大内集落から大内峠を経て火燈山へのコース（火燈古道）を、石川支部の皆さんが整備を継続されているということと、登山口にあった記念碑でした。その副碑には「誰も去りたくてこの大内を去ったのではない。今この地に立つと祖先の魂の悲嘆を大内の者達は確かに聞く。敗戦後本来の文化の大切さを忘れ高度経済成長を目論み文明を求めること急な国の施策に押し流され、小さな村が一つづつ消えて行った。大内もその村の一つに過ぎない。この地から去り難い心と、いつか誰かが移り住むことを願い、茲に碑を建てる。」とありました。強烈な文章でした。集落の方々の気持ちが伝わってきました。今では近くを幹線道路が通っていますが当時の苦勞がしのべれます。



登山口を出発して約 2 時間ほどで火燈山山頂に到着しました。一日コースとして、火燈山、小倉

谷山、富士写ヶ岳を縦走して7時間ほどで一周できるそうです。とてもいい山でした。下山後は心地良い疲れを山中温泉で癒しての帰宅となりました。登山コースと那谷寺、中谷宇吉郎の「雪の科学館」、深田久弥の「山の文化館」をめぐる観光コースがあり富山支部からは石浦会員が参加されました。

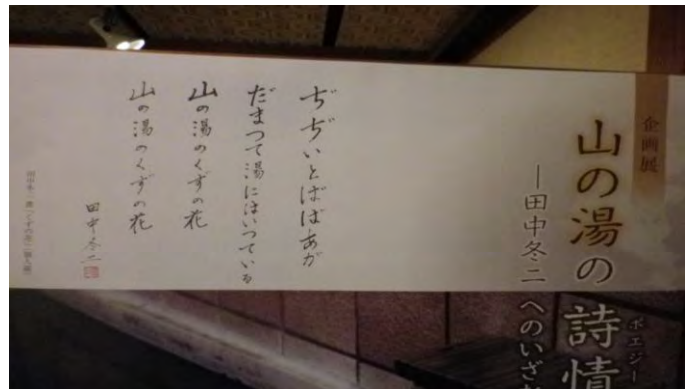
登山コース参加者：木戸、山田、金尾、山岸、渋谷、河合

(河合義則 記)

## アルパインスキークラブ「秋の全国集会」に参加して

日本山岳会のホームページを開くと「三水会」「二火会」「スケッチクラブ」「フォトビデオクラブ」などなど20あまりの同好会があり、その一つが「アルパインスキークラブ」。現在の会員数は約100名で、無雪期の山歩きとスキーツアーの年2回の全国集会を行っている。また『雪上散歩』と題して活動実績などをしっかり纏め写真掲載も多い内容豊富な年報を発行している。

27年度の集会が富山の美味しい魚を食べ翌日は若い時情熱を傾けたであろう劔岳を眺めに中山へ登ろうと生地の「たなかや旅館」で行われた。この日は生憎五支部の合同山行と重なり、また富山支部の会員は現在小生一人だったので私が参加した。その状況を『雪上散歩』に掲載したものを紹介する。



たなかや旅館の前庭に昭和初期を代表する抒情詩人田中冬二の詩碑が雨に濡れていた。冬二

はこよなく温泉を愛し特に信州、黒部界隈の温泉を愉しみ、中でも故郷のたなかや旅館（明治40年代に父方の本家が開湯した鉱泉）をしばしば訪れ作詩に耽っていたという。

今回 JAC-ASC の全国集会が富山で行われ初めて参加させて頂いた。当支部に ASC に加入希望者がおり折角の機会に顔出しをと思っておりましたが生憎五支部合同山行と重なり残念でした。

ところで生地の旅情は如何でした？生地は富山でも最も鄙びた町で黒部川の影響を大きく受け北アルプスの雪解け水が伏流水となって湧き出した清水は名水百選に選ばれ、これらが魚津沖に蜃気楼の幻影を出現させ、またホタルイカの幻想的な光となって富山の名物となっております。

懇親会も各地から持ち寄りの銘酒に富山のキトキト魚で和やかに楽しい時が過ぎてゆきました。翌日は予報通り雨、ひとまず馬場島まで行きそこで登山の可否を判断しようということで車を走らせたが馬場島への谷道は既に紅葉も終わり枯葉が山道を埋めていた。

馬場島も近づいたが雨は止む気配もない。本来なら真正面に見える筈の劔本峰、マッチ箱ピークから北方稜線の峻険な峯は雲に隠れてその姿を見せてはくれなかった。

私は3年ぶりの馬場島だった。馬場島荘の徹さん（劔の文蔵の三男）は大分太り顔が丸くなっていた。兄の友邦さん（劔沢小屋主人）が山での功績が認められ秋の叙勲で瑞宝単光章を受けられ、そのお祝いを述べ雨宿りの休憩に入った。依然として雨やまず、中山登山は中止とし11時流れ解散として全国集会の幕は閉じられた。

散会まで暫く時間があつたので私は安井さんと傘をさし、とっかかりから急登の早月尾根を少し

登り「根っこクライミング」の感触を懐かしんできた。

馬場島は劔岳のみならず周辺に大猫山、中山、赤谷山など日帰りで楽しめる山も多く、また春山スキーは室堂乗越から標高差 1700m、劔岳東大谷出合いまでの立山川は豪快、早乙女岳、大日岳からの滑降も捨て難い。

馬場島は涸沢のような喧騒もなく静かにゆっくり山気分を味わうには格好の場所であり、新幹線で関東圏は特に便利になってきました。ぜひまたお越し下さい。(近藤晋 記)

## 日本山岳会創立 110 周年記念式典、祝賀晩餐会と 記念懇親山行に参加して

12月5日(土)早朝に新高岡駅から北陸新幹線かがやきに乗車して2時間30分余りで快晴の東京駅に着きました。途中軽井沢駅を過ぎたあたりから白雪輝く浅間山が一際くっきりと見えて、今年初めて参加する年次晩餐会に次第に期待が高まってきました。14時のホテル受付にまだ時間があったので都庁の展望タワーに登り、切り立った高層ビル越しに富士山のなだらかな山容が見えて感動しました。昼食のあと会場の新宿京王プラザホテルに入るとすでに多士済々の会員が集まっており一変に高揚感が増してくるのがわかりました。すでに講演会、山岳写真展や図書即売会等が行われており、各会場をじっくりと見てまわりました。

17時から皇太子殿下ご臨席のもと厳粛に創立110周年記念式典がとり行われました。今回富山支部からの出席者は河合、川田、近藤、渋谷、菅田、本郷、山田夫妻と藤井の9名と、来賓として立山カルデラ砂防博物館の飯田学芸課長が参加しておられました。正装した550名が参列した各テーブルには日本百名山の山名がついており、私たちは「雲取山」でした。引き続いて祝賀晩餐会が行われ、本格的なディナーを十分堪能しました。今年の新入会員の紹介が行われ、私を含め55名が壇上に立たせていただき光栄でした。

その日は京王プラザホテルに宿泊し、翌日日本山岳会の方の案内で、会員90名(うち富山から6名)がホテル横から2台のチャーターバスに乗り、中央高速から富士五湖の精進湖まで行き、精進湖登山口から本栖湖パノラマ台(標高1328m)に登り、中之倉峠まで晩秋の落ち葉の絨毯を踏みしめながら3時間余り歩きました。パノラマ台からは青木が原を前景に薄っすらと白雪を抱いた富士山が真正面に望め、中之倉峠からは千円札に描かれている富士山の絶景が望めました。残念ながら「本栖湖に映る逆さ富士」は見えませんでした。

帰りは心配された高速道路の渋滞もほとんどなく、帰りの新幹線に十分余裕を持って着きました。新幹線に乗る前に東京駅八重洲口の『山形酒菜一』で夕食を頂きました。山形の辛口地酒や郷土料理を美味しくいただきほろ酔い状態で帰宅の途につきました。今回は本当にいい思い出になりました。役員の方々には大変ご苦労さまでした。

(藤井久一 記)



記念懇親山行でパノラマ台から見た富士山

## 12月例会報告

と き : 平成 27 年 12 月 11 日 (金) 18:00～

と ころ : C i C ビル 3F とやま市民交流館 (学習室 1, 2, 3)

参加者 : 18 名

報 告 : 支部長会議、創立 110 周年記念式典・晩餐会の報告、登山報告 (9 月聖岳・10 月鋤崎山・7 月飯豊山)

暖冬の中、12 月例会を行いました。日本山岳会創立 110 周年記念式典など山田支部長より報告がありました。登山報告として、渋谷会員より 9 月の例会山行 (聖岳: 南アルプス) のスライド説明があり、次回は南アルプスの主峰、赤石岳の希望がありました。聖岳の報告は 100 号に掲載されております。もう一つ、10 月の例会山行 (鋤崎山) がありました。天気が良く、登山者の多さにびっくりしたとのことでした。最後に山田支部長より 7 月の例会山行 (飯豊山) の報告。続いて、場所を移し駅前の『やるき茶屋』にて忘年会を行いました。来年度の新たな山行などについて語り合いました。 (有澤辰彦 記)

◇3 月例会山行の案内

期日 : 3 月 26 日 (土) ～27 日 (日) 、 場所 : 鉢巻山 (南砺市利賀村)

◇平成 28 年度の総会案内

期日 : 4 月 15 日 (金) 18:00～ 、 場所 : 富山電気ビル  
3 月下旬に、改めて案内申し上げます。

## 1 月富山支部親睦会・例会山行 (瀬戸蔵山 1320m)

今年度の富山支部親睦会が、1 月 22 日 (金) 午後、例年のように立山国際ホテルで開かれた。懇親会が始まる前に、総会として、近藤晋代表幹事から親睦会の発足の経緯や会計報告があり、来期からこの親睦会の代表幹事を川田邦夫に交代して欲しいとの提案があり、承認された。そこで、川田が今回の親睦会の報告をします。

この中で、親睦会内規に記してある事業について、「親睦会会員の冠婚葬祭に関する事業を行う」とあるが、これを少し拡大して、喜寿、米寿 (数え歳) 等の該当者に祝いの品を贈呈する事にしようという提案が出され、了承された。



また、今年度の入会登録者として、飯田肇会員、森田裕子会員の 2 名が承認された。不慣れなままで、代表幹事を務めることになりましたが、近藤前代表幹事や会員諸氏に助けていただきながら、楽しい会にしたいと思っています。  
参加者 : 16 名 (川田邦夫 記)

前夜の親睦会の余韻を残しながら、翌日1月23日(土)、立山国際ホテル前で記念撮影。9時過ぎにゴンドラ駅に集合し、山頂駅で身支度して瀬戸蔵山を目指しました。積雪は1m位と例年に比べ少なく、ブッシュが出ていることからコースが取りにくい状態でした。ワカン、スノーシュー、山スキーで各自新雪を楽しみ、1時間余りで瀬戸蔵山に到着。休憩後帰路をたどり、山スキー、スキーデポ組はグレンデを滑り降りました。 山行メンバー:永山、山田、近藤、山岸、渋谷、島津、鍛冶、森田、北田



(北田幹夫 記)

## 私のかかわった山岳遭難 その5 (最終回)

—多くの遭難に学ぶ—

佐伯 郁夫

前回に書いた荒木・江尻の遭難から魚津岳友会に死亡事故は発生しなくなったが、落石による骨折事故などは何度もある。そのつど県警ヘリコプターによる素早い救出で、おかげさまで私などの出番はなかった。

### 県警鍛冶隊員の早月尾根での滑落

1990年3月、山岳警備隊の春山訓練で早月尾根を下山中の鍛冶啓一郎隊員が池ノ谷へ滑落。これまで多く世話になった警備隊へ少しでも恩返しのつもりで魚津岳友会から10名の会員が協力することになった。その応援隊を取り仕切ったのは劔沢小屋主人の佐伯友邦である。

私はラッセル隊として佐伯徹(現馬場島荘管理人)と2人空身で馬場島を出発する。食料や水を背負った者があとに続いたが、振り返っても姿が見えない。懸命にラッセルをする。高度を上げるごとに雪は深くなる。1400mぐらいまで登ったが食料も水も届かないので2人とも渴きと空腹で進めなくなり、下ることにする。途中で本隊に会う。彼等も深い雪に阻まれ、伝蔵小屋(現早月小屋)に入ったのは翌日であった。その後は悪天続きで捜索の効果はなく雪解けを待つことになった。

夏山が近くなる頃、山岳警備隊は小窓尾根1600mから池ノ谷におりた地点にテントを張って連日のパトロールを重ねていた。私も一度池ノ谷を訪ねている。その後県警のパトロールで遺体が発見された。

### 錫杖岳で会員富山宏美が墜落

1993年5月23日夕刻、魚津岳友会会員富山(とみやま)宏美が錫杖岳で墜落したとの連絡が入る。錫杖岳中央稜P2で登攀を終え、ザイルをはずした後、コルへ降りようとしてリッジ上の残雪でスリップ、110mを落ちたとのことであった。

24日早朝に魚津を発って槍見温泉で、魚津岳友会・岐阜県警神岡署の山岳警備隊・黒檜山岳会で収容隊を編成。クリヤ谷から錫杖沢を登った中央稜P2の岩壁下に遺体はツェルトに包まれていた。警備隊のスノーボートに入れて槍見温泉まで運び神岡署で検死と事情聴取を受け、家族の待つ家へ届けた。

富山は出発前に登山靴を忘れたとあってリーダーの車で家へ靴を取りに戻っている。①その時点でリーダーは登山靴を点検すればよかった。軽登山靴で、残雪期の山では底の硬い靴で雪を蹴り込んでステップカットをする必要があるのにそれに適さないものであった。②登攀終了地点でザイルを解かなければよかった。新人でまだ雪上歩行に習熟していなかった（注1）。荒木、江尻の遭難から14年目の事故である。

### 石川県財界のトップが僧ヶ岳で

1993年7月28日、山岳警備隊から電話があり、僧ヶ岳で事故があり手を貸してほしいとのこと。この時期は夏山最盛期で室堂、劔沢等に隊員が分散していて人手不足なのである。

行方不明者は北國銀行元頭取（当時は会長）、同行者は石川県勤労者山岳連盟に所属する会の会員達。宇奈月尾根が工事通行止めのため引き返し、魚津側の東又コースから山頂を往復。下山時最後方を歩いていた人が、いつまでたっても降りてこない。最後に別れた伊折山（1350m）まで戻ったが見当たらないということであった。

7月29日朝、山仲間3人と登山口に着くと、石川県警のパトカーが2台も待機していた。労山の会員も集まっていたが、石川県警は労山の入山を許さなかった（石川県警と労山の関係を垣間見る思い）。山岳警備隊の高瀬洋（現山岳警備隊長）らと私達の数人で伊折山に向かう。1000mくらいの所で木の根元に小さなスリップ痕を発見。そこから少し下ってみると金沢の料亭の手拭が落ちていた。元頭取のものに違いない。ここで迷って沢に下ったものと確信する。そのまま沢へ下ってみる。10m位の滝があり、がっくりしたのか座るようにして上半身裸で倒れていた。何も持っていなかった。

ふつう、尾根の下りで道を失うと沢の源頭が緩やかに広がり歩きやすそうに見える。でも、たいていその先に滝が待っている。間違えたと気付いても登り返す体力がなかったら、何かを着込んでチョコレートの一つでも口にしていればよかった。そうすれば7月の低山で、低体温症で死亡するなどは避けられたと思う。ところが元頭取のリュックは同行者が持ってさっさと下山していた。疲れた人の荷物を持ってあげるのは親切そうに見えるけど、この場合は命取りであった。荷物を持ったのなら、その人にぴったりと付くべきである。金持ちなのだからプロの登山ガイドを雇えばよかったのに。

### 高岡の会社役員が毛勝山で行方不明

1995年5月29日、県警山岳警備隊から電話があり、毛勝山で前日から帰らない人がいるので捜索に手を貸してほしいとのことである。寺崎工業の寺崎健治という人で単独行である。毛勝谷を登ったと考えられ、上部の小さな沢も警備隊によって探された。私は視界の悪い時に一番間違いやすいのは大明神沢と判断し、妻と二人でこの沢を登った。大明神山の頂上に登り周辺を捜したが手掛かりは得られなかった。連日、山頂から小黒部谷まで考えられる限りの捜索が行われた。魚津岳友会では私を含め延べ37人が出ており、他にも多くの山岳会が協力した。捜索中、ガスの濃い日にバリバリと轟音をとどろかせて自衛隊ヘリコプターが雪面すれすれに飛んだ。暗視装置付なのだろう。政治の力が働いたことを感じた。

6月2日これを最後にしようという日、南又谷の支流、小沢の雪渓上で山岳警備隊によって無事発見された。初めに私が考えた通り、ガスで毛勝谷入口を見落とし直進し大明神沢を毛勝谷と信じて登ったようである。彼は大明神山山頂で更に方角を失い小沢の谷に迷い込んでいる。それにし



ても残雪の上で6日間も生き続けたのは強い生命力であった。

### 高田明子の日照岳遭難

2000年、立山山麓で冬季国体が開催された。降雪の少ない年で称名道路からトラックで雪を運んでコースを造りようやく開催に漕ぎつけたほどである。それが3月に入って大量の降雪があった。3月5日には大日岳で文部省登山研修所の研修中、巨大雪庇崩落で大学生6人が流されうち2人が埋まって死亡している(注2)。

私は3月中旬から2週間、ノルウェーのトロルロイパーという200kmに及ぶ世界一長いスキーツーリングコースに行っていた(注3)。帰国してチロル山の会の高田明子が岐阜県の日照岳(1751m)で巨大雪庇の崩落により谷底へ落ちたことを知る。テレビや新聞が大々的に報じたあの日照岳の事故からわずか10日後のことである。

高田明子はチロル山の会のほか、双嶺山の会、高志山の会にも入っていたが、いずれの会にも軸足をおかず、山行つまみぐいという感じであった。健脚で、個人山行での鷲羽岳日帰り登山などを自慢していたという。同行者はとなみ野山学会の中川康。捜索には関係団体4つのほか岐阜県警や協力団体などがかわり、救助隊の運営は多岐であったが、現場から地理的に近いということとなみ野山学会が中心になってくれた。

私は4月23日に捜索に入った。谷は細く両岸は急傾斜で何度も高巻をする。そのたびにフィックスロープを張った。1350m地点に大きなデブリが盛り上がっていた。その地点に間違いないと確信、融雪が進むのは連休明けと考えてスコップなどをデポして引き返した。

5月4日となみ野山学会と家族によって雪面に出たワカンが発見され、深く掘り下げて遺体を収容した(注4)。なお、中川康は翌年岐阜県のオゾウゾ山で遭難死している。

### 黒部川下ノ廊下で石川県職員の転落

阿曾原温泉小屋の佐々木泉さんから「今年の紅葉は美しいよ」と電話がかかってくる。

2007年10月27日、小雨であったが妻と2人、阿曾原温泉小屋に入る。翌28日は天気予報通り晴天であった。十字峡のすぐ先に、岩壁からシャワーのように水が落ちているところがある。2mたらずの距離だが、前日の雨でかなりの水量。面倒だが私たちはカップを着て安全に通過する。峡谷の紅葉は美しく写真もたくさん撮れた。白竜峡で引き返す。

十字峡の近くまで戻って小さな水場で昼食をとった。私達の前を何組かの登山者が通過していく。さてと、立ち上がり、シャワーの岩壁に近づく。朝よりは水量が減っていたが私たちはカップを被ってゆっくり通過。カップをしまっていたら何か異様な気配。

私たちの直前にシャワーの岩壁を通過した2人組の1人が落ちたのだという。目を凝らすと10mほど下の滝の途中にザックを担いだままの人間が頭を下に突き刺さっている。呆然と立ち尽くす連れの人に、住所、氏名、年齢などを聞いてメモにし、下山する人に託す。仙人ダムから電話して阿曾原温泉小屋に連絡してもらおう。小屋には警備隊の飛騨隊員がいる。へりを頼むしかない。集まった人達もみな足早に去って誰もいなくなった。

この場所は濡れるのをきらってシャワーの中を走り抜ける人が多い。その人も走り抜けようとした。滑落防止に谷側に固定してあった丸太に足をかけ、そのままスリップしたらしい。濡れ丸太は滑る。落ちたのは石川県土木課の水井吉博さん。同行者は同じ課の人という。土木課ならNさんを知っているかと聞いたら金沢工大も県庁へ入ったのも同期という。当時私は金沢工大山岳部のコー

チをしていたなどをポツポツ話しながらヘリコプターを待つ。

消防防災の赤い機体が飛来する。手を振って事故者の位置を知らせる。県警のヘリよりウインチのワイヤーが長いので急斜面でも高い位置から隊員を吊り下げられる。10分ほどで水の中から抱き上げるようにして機内に収容していった。峡谷の断崖道は暗くなりかける。放心状態の連れの男を仙人ダムまで連れ帰り警備隊と合流、臨時便の上部軌道に乗せた。黒部署に転落者の家族が待っている。つらい夜になるだろうなと思いながら見送る。

### おわりに

山岳警備隊は創設 50 周年になった。以前は事故の処理は当事者が行うのが当然であり、また発足当初隊員は少なく、なにかと手伝いすることが多かった。今では隊員も多くなり、ヘリコプターによる迅速な救助もある。100%安全な登山はない。多くの事故例から学び、危険を避ける感覚を身につけたいものである。

注1 『錫杖岳中央稜遭難事故報告書』 1993.8 魚津岳友会

注2 私は6月16日、山仲間と4人で大日山谷へ学生の捜索に入っている。この事故は遺族が訴訟を提起し、文部省側の証人は引き受ける人がなく、やむなく私が証人となって裁判で大変苦勞した。

注3 私達のトルロイパー紀行は岳人2001年2月号(644号)でカラー5頁にわたって掲載された。

注4 「岐阜県白川村日照岳遭難捜索報告」 富山県山岳連盟遭難対策委員会・となみ野山学会

## モンゴル草原紀行

—ノモンハンへの旅—

鍛治 哲郎

昨夏、またモンゴルへ行って来た。東部の大草原（モンゴル政府のパンフレットには、「アメリカのプレリーとヨーロッパの草原が人工草地となってしまった今、地球上最大の自然草原」とある）と、日本にはない砂漠を見たかったからである。参加者7名の中には現役のサラリーマンもいたし、私のような暇人もいたので、まずは現地ツアーの日程（6月23日～29日）を決め、日本からの往復は各人にまかせた。また、現地ツアーの具体的な旅程は、前日も世話になったウランバートルのB氏（日本に留学経験があり、旅行コーディネーター兼ガイド兼通訳）とメールでやり取りをして詰めた。当初、B氏に当方の希望を伝えたら、「あの辺は、私も初めてなのでワクワクします」とガイドらしくらぬ返事が来て少し心配になったが、なんとか出発までには旅程も決まり、ほっとして日本を発った。

草原の旅は、ウランバートルのホテルに全員集合で始まった。初日は、昨年行ったウランバートルの東500kmのバヤンオボー村までである。宿は小中学校の寮で、夏休で帰省中の寮生のベッドで寝た。2日目は近くの遊牧民のゲルに民泊で、遊牧民の生活体験や草原の探索でのんびり過ごした。同じ時期に来た昨年は緑したたる草原に野の花が咲き乱れていたのに、今年は干ばつで半砂漠の様相である。このため、遊牧民は草を求めて北の方に移動しているという。楽しみにしていた星空も、空中に漂うダストで天の川がかろうじて判別できる程度であった。その代わりというべきか、もっと南の家畜であるラクダの群れを見ることができたのは、旅行者にとってはありがたいことであった。現地の人が、数個の不発弾とおびただしい数のコンクリート疑似爆弾（投下訓練用）が放

置されている草原に案内してくれた。ノモンハン事件（1939年）で日本軍と戦ったソ連軍のものだと聞いた時は、亡霊に出くわしたような気がした。

3日目は、いよいよ中国国境地帯へ向かう。東に行くに従い周辺の山が低くなり、ついに、四方、大海原のようになった。チョイバルサンからは草原の轍をたどる。地平まで人も家畜も全く見えないが、たまに里程と方向が示された標識が現れる。我々はひたすら Х а л х（ハルハ）を目指す。「大自然」には野生の宝庫のイメージがあるが、印象はむしろ逆で、サイレントスプリングのような不気味さである。家畜の死骸などをあてにしている猛禽類はわかるが、それ以外の野鳥も少ないのはどうしてだろう。国境警備隊の検問所が見えてきたあたりで、テントを張ることにした。

4日目、検問所には、女性や子供もいた。騎馬兵の写真が貼ってある。巡視艇の写真もあるが、海のないモンゴルのどこで使うのだろう。地域住民以外が中国との国境地帯に入るには事前の許可が必要なので、我々は、ウランバートルで許可証をとってきた。警備隊は、中国から国境を越えてくる密猟者にも目を光らせている。検問所からしばらく走ると、突然、油井が現れた。見渡す限り延々と散らば



写真1：ハルハ川村、川の向こうに国境がある

っている。人影は見えないがポンプは動いている。掘っているのは中国企業で、掘った石油はすべてパイプラインで中国へ直送されるそうだ。更に行く、左側にブイル湖という琵琶湖程の湖がある。水があるから遊牧民がいる。運転手とB氏はさっそく服を脱いで湖に飛び込んだ。馬で二人の少年がやって来て、彼らも泳いだ。すぐ横では、牛や馬が水浴びをして排泄をしているから透明度はほとんどない。モンゴル人には家畜が汚いという感覚はないのだろう。頭まで水につかり楽しげである。対岸は中国である。

再び人けのない草原を走ってハルハ川が見えてきたら、また検問所があった。「1939年」と書いて当時の戦車が飾ってある。ハルハ川村が近づくと、川を見下ろす高台に1939年のノモンハン事件の戦いで死んだモンゴル兵の慰霊碑があちこちに建っている。ノモンハン事件に関する本はたくさん出版されているから詳細はそれらに譲るが、旧日本軍の官僚体質と精神主義による無茶な戦いであったことは間違いない。日本側は、火炎瓶でソ連の戦車に突撃させられ、停戦後に生きて帰還した部隊が自決を強いられたというし、ソ連の戦車には、兵隊が逃げ出さないよう外側からカギがかけられていたというから、哀れなのは兵隊である。日ソの戦いに巻き込まれたモンゴルこそ好い面の皮であったろう。そうしてみると、のどかな景色が違って見えてくる（写真1）。ハルハ川村の宿は、戦勝博物館に併設されていた。解説員が博物館を丁寧に案内してくれた。飯盒、軍服など日本兵の遺物も展示され、悪名高い細菌部隊の事も詳しく紹介されている。見ごたえのある施設だが、客は極端に少ないだろう。



写真2：背景はシーリンボグド山、日本人とモンゴル人、わかりますか。

5日目は、中国国境にそって西に向かう。午前中は、目印となるものが何もない平原である。日本側にはGPSと磁石があったので、運転手に方角が違うのではないかと何回か伝えたが、リーダー格の運転手は、毅然としてこれでいいのだという。

結果は常に運転手の記憶と勘が正しかった。ガゼルの群れが何度か目前に現れたので日本勢は大満足。午後は、山がちになり、聖山のシーリンボクト山の登山口では、運転手達は五体投地でお祈りをしていた(写真2)。一带は、明らかに火山成とわかる地形で、阿蘇の米塚のようなスコリヤ丘があちこちにある風景は、非日常的で神聖な趣がある。火山地形は、後日、訪れたアルハンガイにも、スコリヤ丘や溶岩流など壮大なスケールのものであったから(写真3)、「理科年表」の火山データにモンゴルのものがないのは、片手落ちである。この日は、ダリガンガーという村に泊まり、目の前にスコリヤ丘があったので、朝、みんなで登った。6日目も、中国国境沿いに西に走る。次第に草がまばらになるが、今日もガゼルがいた。目的地のサインシャンドは、ウランバートルから北京に至る国道と鉄道が通る砂漠の街である。中国人経営のホテルで旅行中初めてシャワーをつかう。最終日は、中国のトラックが行交う幹線道でウランバートルに戻り、日本に帰る3人の送別を兼ねて打ち上げをした。

翌日は、残った4人で、ウランバートルから車で3~4時間のホスタイル国立公園へ一泊二日、さらに、最後まで残った私ともう一人で、モンゴル中央部のアルハンガイ地方に二泊三日の急ぎ旅をした。これらの地域には、景勝地やモンゴル帝国の古都、遺跡など見どころが多く、水洗トイレ、シャワー付きの観光ゲルが随所にある。値段はリーズナブル、食事も西洋風で食べやすく、快適で気楽であった。



写真3:アルハンガイの溶岩原

今回の旅では、4,000km以上走った。最後まで付き合ってくれた運転手は、8月には、ドイツ人カップルから一か月の予約が入っているといていた。一か月は無理だが、次回はアルタイ山脈の氷河を歩いてみたいものだ。

## 編集後記

記録的な暖冬で積雪が少なかったことから、県内スキー場ではオープンが遅れたり中断したりと悲鳴に似た声が聞かれ、山の雪もまた少ないようです。佐伯会員の特別寄稿「私のかかわった山岳遭難」は最終回となりましたが、山に関わる者が肝に命じなければならないことを改めて教えていただきました。異常気象が続く昨今、ちょっとした不注意や準備不足が大変な犠牲を伴う遭難に結びつきます。

さて、富山支部会報は新たな一步となる第101号となりました。山行、活動報告を中心に誌面の充実に努めます。

(編集委員 北田幹夫 記)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第101号

発行者：山田信明 編集者：川田邦夫・北田幹夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204 河合義則方

電話 076-492-3936 , 090-4326-6197 Eメール [kawa-mori55@air.ocn.ne.jp](mailto:kawa-mori55@air.ocn.ne.jp)